

戦間期アフリカにおける 日本製シャツの位置付け

杉浦 未樹

法政大学経済学部

はじめに

本報告では、戦間期に東アフリカに輸出された日本製シャツが、現地の装いの規範のなかでどう位置付けられていたのかを考察します。今日では中国がアフリカへの衣類輸出国として知られていますが、1940年の時点では日本がアフリカへの最大の衣類輸出国でした。織物も輸出していましたが、価格では衣類が上回りました。そのなかでも三分の一を占めたのが「シャツ」類でした。素材は莫大小（メリヤス）が多数を占め、他は綿製でした。

アフリカのなかでも1920年代後半から40年代にかけて輸出が伸びていった地域が東アフリカ（ケニア・ウガンダ・タンガニカ・モザンビーク）でした。日本のアフリカへの衣類の輸出は、第一次世界大戦中にヨーロッパからの輸出が低下したことによりインド経由（とくにムンバイ）で日本製品が流入して始まりまし。第一次世界大戦後日本からの輸出も増加しますが、イギリスやフランスが警戒し英仏直轄の植民地では制限をかけたため輸出が伸び悩みました。これに対して委任統治領も含んだ東アフリカでは輸入規制が緩く、1920年代後半から1930年代にかけて輸入が伸び続けます。大阪からモンバサへ直接航路も開き、ウガンダなど内陸へと市場が伸びた点が特徴です。

もっとも1940年の本邦輸出統計をみますと対アフリカ取引が貿易総額に占める割合は、輸出で4.3%、輸入で3.2%と多くはありません。しかし、現在（2020年）にアフリカが貿易総額に占める割合は輸出入ともに1.5%程度ですので、いまよりも相当大きな割合であったといえます。1940年のアフリカ向けの輸出雑貨の主要品目を価額からみると、首位が毛織物（13.7%）で、次位にシャツ（12.0%）、メリヤス靴下（5.4%）、布団（4.9%）、陶磁器（4.7%）が続き、洋服（3.7%）も品目として、茶（4.0%）や罐詰類（3.9%）に並んでいます。分

類ごとにみると、「衣類及び同附属品」は全体の三分の一を占め、その中で、シャツとメリヤス製品と洋服が6割を占めていました。

シャツをめぐるさまざまな規範

このように戦間期に大量の日本製シャツが東アフリカにわたったわけですが、それらのシャツは現地の装いの規範のなかでどう位置付けられてきたのでしょうか。それにはまずシャツをめぐる規範を考える必要があります。シャツとは必ずしも定義がはっきりしたものではありません。「肌と上着の間に着る衣」とされ、形状もさまざまです。しかし、この定義からだけでも、「裸」、「肌着」、「下着」、「清潔さ」、「衛生」、「温度調整」、「白さ」といった、衣服の根幹にかかわる規範が絡んできます。また、シャツは、衣類の中で価格弾力性が高く、ぜいたく品から大衆消費品、さらには必需品へと比較的早く価値が変容・転換してきました。服飾史家たちはシャツの価値の変容ともなって新しい規範が形成されていくことにも注目してきました。

戦間期のアフリカのシャツを論じる際には、これらの規範にくわえて、裸で生活することから衣服を着用するようになったことをめぐる規範や、洋装をめぐる規範が絡んできます。洋装とシャツの関係も複雑です。戦間期のアフリカとは地域も時期も離れますが、1820年代後半にイギリスの画家のオーガスタス・アールはオーストラリアのニューサウスウェールズを訪れた際に、シャツを着用せず肌に直接イングランド軍のレッドコートとみられるジャケットを羽織ったアボリジニの姿を数点描いています（図1）。この男性の装いは、ジャケットを着用していても洋装とみなさない人が多いのではないのでしょうか。つまり、洋装は、一つのアイテムで決まるものではなく、一連のアイテムがそろっている必要があるのです。その中で、シャツは着用しないと洋装が成立しない重要なアイテムとみなされました。

No Image

図1 アウグスタス・アールが1826年に描いたニューサウスウェールズの現地人家族のスケッチ

出典：オーストラリア国立図書館コレクション12/45

しかし、その一方で、シャツが単体で洋装かどうかを考えると、その定義のファジーさに思い至ります。シャツの起源についてはここでは触れませんが、洋装以外のスタイルにもシャツと位置付けられるアイテムはあり、また洋装由来であってもシャツは他のスタイルと組み合わせやすいのが特徴です。たとえばシャツを着物の中に着ることは、16世紀にヨーロッパにわたった天正遣欧少年使節がすでに実行していました。また、シャツは水夫のアイテムとして、人の移動が進展するにつれ越境性高く発展していきました。

日本製シャツは 先行欧米製品の模倣品にとどまったのか

さらに、もう一つ交差して考えなければならない点があります。日本製シャツが交易品で、しかも元来洋装国ではない日本の輸出品であったという点です。交易される衣料品は輸出する地域と輸入する地域で用途が変わることがあります。たとえば日本の帯(おび)を輸入地域のほうではスカーフに転用することなどです。シャツの場合ですと、輸出する地域では肌着・下着として外に出さずに使われているものが、輸入する地域では上衣として外に出して使うなどの用途の変化が考えられます。

それと同時に、衣料品の用途や価値づけは伝播され共有されるものなので、輸出する側と輸入する側のどちらにイニシアティブがあるかという問題が発生します。グローバルな衣料品流通では、輸出国の流行がそのまま輸出されることもありますし、ローカルな需要に合わせて遠くの地域が製造することも起こりえます。日本が輸出したアフリカへのシャツの

場合は後者でした。しかし、そのときに、シャツを洋装品と考えるために、日本とアフリカの相互のやりとりだけでなく、欧米も構図に入ってきます。欧米にイニシアティブがおかれ、日本がアフリカへ輸出した布や衣類は、欧米がアフリカに提供してきた先行製品のコピーであると位置づけられるのです。つまり、「シャツ」や「肌着」が輸出されたというときに、かなり自動的に、欧米がアフリカを洋装化させ大衆に洋装品が広まっていく過程で、日本が追隨して廉価な模倣品を提供したという説明になる傾向があります。しかし、この発表で問い直したいのは、現地の装いの規範に照らし合わせたときに、欧米の廉価なコピー品という理由だけで、東アフリカの人々が日本製のシャツを着用していたのかということです。

もちろん、当時の史料をみると、輸出する日本側には、欧米に追いつこうとする姿勢があり、積極的に欧米製品を模倣しようとした点があることは確かです。これに関連して、日本のアフリカへの繊維製品の輸出を扱う研究者、特に経済史家は、輸出品を原料、半加工品、完成品と段階的に分類して、貿易の高度化をみる傾向が強いです。たとえば、「最初は未漂白の粗布だけを輸出し、捺染布はイギリス製品が占めていた」などの言い方です。これは決して間違いではなく、また日本と欧米の輸出諸国間の国際競争の展開は重要な研究テーマではあるのですが、そこにだけ注目すると「日本が欧米の模倣品をつくる」という見方が強化され、現地の視点を取り入れられないばかりでなく、現地の人が日本製品にどんな新しい意義を見出したのかについても吸い上げにくくなってしまいます。

本日の発表の趣旨

そこで本日の発表では、東アフリカの現地の規範で日本製シャツはどのように位置付けられたのかを考えていきたいと思ひます。私は残念ながら東アフリカ側の現地資料は見つけておりませんが、日本の領事報告や貿易統計や現地市場調査には、欧米やアフリカ現地でも残っていないような報告が含まれています。これらの資料からの分析は、どうしても売る側視点になってしまひますが、現地の観察記録の箇所を精読し、さらに同時代の写真集や絵葉書などの画像資料を使い報告します。報告の趣旨を先に申しあげますと二点に集約されます。第一に、日本製のシャツが、東アフリカでは洋装の分類でも、スワヒリという沿海都市部で発達したスタイルでもない、第三の分類のもとで着用されていたことです。第二に、日本の輸出アプローチが先行したイギリスやアメリカなどとは異なっていたこと、そして日本製品が先行したイギリスやアメリカの製品に比べて現地のニーズに即した新しい価値を提供していたことを紹介したいと思ひます。

I 洋装でもスワヒリでもない分類のなかでの拡大

アフリカと洋装化

日本製シャツが洋装でもスワヒリでもない分類のなかで普及していたことを述べるには、アフリカにおける洋装化を考える必要があります。アフリカは広大な地域ですのでまとめて扱うことは危険ですが、全般的にアフリカとヨーロッパは距離が近い日本よりもずっと古くから交流があり、多くの地域において「洋装」と括るまでもなくヨーロッパの織物や衣料が古くより流入し活用されてきました。しかし、19世紀後半から20世紀初頭に「洋装」という分類があらわれてきます。この分類は、形状やアイテムによる分類というより、むしろ関わった集団によって政治的に決まったものと捉えることができるかもしれません。一つの例に宣教師が洋服を布教に使ったことが挙げられます。宣教師は、上から下までアイテムをなるべく揃えてフルに洋装をするのがよいとしたわけではなく、選択的に衣類を適用しました。たとえば、子どもに帽子や靴の使用を禁止しました。このように洋装アイテムを選択的に適用した慣行があったため、現地で上から下までをフルに洋装にすることは、欧米勢力に対する迎合を示すだけでなくむしろ

抵抗や矜持を示す手段ともなりえました。従って、この二つの洋装は別なタイプの装いとして区別する必要があります。

一方、アフリカの洋装はすべて欧米から伝播したわけではなく、広大なアフリカの中で伝播したものでもあります。アフリカ内で洋装ファッションがすすんで展開した地域に西アフリカが挙げられます。リベリアが独立した後、アメリカやカリブ海から帰還したアフリカ系の人々が持ち込んだスタイルが展開します。また、西アフリカはアフリカの中でもヨーロッパ諸国に近く、フランスのファッションをいち早く取り入れてきたともいえます。こうして出てきた西アフリカの様々な洋装スタイルがアフリカ内の各地に影響をあたえ、たとえば、中央アフリカのコンゴの洋装は、西アフリカのスタイルに触発されたものでした。アフリカの洋装は、こうしたアフリカ内の相互展開をなくしては語ることはできません。日本の洋装も、欧米からももちろん影響を受けているものの、背広や学生服をはじめ、日本独自の文脈のなかで形成されたことともつながる点かと思ひます。

19世紀の東アフリカと洋装

東アフリカと洋装との関連をみると、近世期にインド洋交易が発達するなかで、沿海部ではヨーロッパの衣類に接する機会は多数あり、さらに1830～1890年ごろは、宣教師が流入し洋装を部分的に布教に利用し、またイギリス、フランス、ドイツが植民地化の意図をもって進入し洋装が一層入っていきました。ただし、同時にそれらの勢力に抵抗するためにも、オマーンが支配を強めて、ザンジバルを中心にアラブに影響を受けた文化を開花させ、スワヒリ文化の礎ができ、モンバサやダルエスサラームなどの沿海の都市部へと広まりました。一方、マダガスカルは、植民地化前に1810年に即位したラダマ1世に始まって、王家の礼服や新たに組織した軍隊と学校の制服を軸に、積極的に上からの洋装化をすすめていました。

ところが、1895年に英領東アフリカが成立すると、イギリス人支配者たちは自分たちと区別するために、現地の人に洋装を奨励せず、かといって裸に近いままでいることを奨励するのも都合が悪く、スワヒリの装いを奨励するという施策をとりました。スワヒリの装いとは、カンズーという白い長いシャツを着て、フェズ帽を着けたものです。女性の場合は、カン



図2 1926年に日本領事が撮ったナイロビの鉄道停車場

出典：外務省通商局「英領東アフリカ事情」外務省通商局、1928年

ガという150~180センチぐらいの一枚布を複雑な形でまとう装いが成立していきます。前述したように、アラブ・ムスリム文化に結びついた装いでしたが、解放奴隷の人たちも着用し宗教をこえて沿海都市部では広がりました。

20世紀初頭に鉄道が内陸へと引かれると、都市の影響をうけて内陸の人々も衣服を着用するようになりました。この発表における内陸とは、ケニアやタンザニアの沿海部をのぞいた高原地帯や、ウガンダも入ります。白人、インド人、現地人で分けて、現地人は洋装してはいけないとされました。イギリス側は内陸の人々にもスワヒリの装いが広まることを期待していましたが、ムスリムと結びついた装いであったことやお金がかかることから、スワヒリは内陸部にそれほど広まりませんでした。

1920年代の絵葉書写真から

それでは内陸部で広まった、洋装ともスワヒリとも分類されない装いとはどのようなものだったのでしょうか。1920年代に撮られた写真から見ていきましょう。図2は、1926年ごろに日本領事が撮影したナイロビの駅前写真です。ナイロビはケニアの現首都ですが、モンバサとウガンダを結ぶ鉄道の補給拠点として1899年に設置された都市です。沿海のモンバサからは内陸に400キロ以上離れています。この写真にうつる人々は、現代人の目からすると、ほとんどが洋装とみなされるかもしれませんが、こ

の中で当時洋装とよばれていたのは、中心よりやや右手にうつる、駅を背にして歩いている男性と、その横の子供たちです。男性は、ヘルメット型の帽子、シャツ、蝶ネクタイ、スーツジャケット、長ズボンを着用し、写真ではみえませんが、おそらく靴下も靴も履いていると考えられます。このように上から下までそろえたのが当時洋装とみなされる装いでした。アフリカ系の男性も、駅門の右手にたつ人は、中折れ帽、ジャケット、半ズボン、長靴下を着用し、洋装そのものですが、この装いは上述のフル洋装とは区別されていました。一方、内陸部で特に広がったのが、画面左手にみられる、現代でいうところのTシャツと半ズボンに裸足ないしゴムサンダルというスタイルです。これらのスタイルは、当時は洋装ではないとされ、イギリス人支配者側はこれらの装いをみても、洋装をしないという規定に反するとは考えなかったのです。

カジュアルな装いが浸透している現代人の我々の目からは、これが洋装でないといわれてもなかなか区別がつきにくいですが、ここで同じく1920年代のナイロビ駅のホームの絵葉書をみてください(図3)。この写真のなかで、図の左手のヨーロッパ系の人々は半ズボンとシャツというサファリルックを着用しています。それに対して、右側の柱付近にアフリカ系の人々は同じく半ズボンにシャツという装いですが、サファリルックとは帽子や靴や靴下の有無によって区別されます。またシャツの形状も左手のサ

No Image

図3 1920年代とみられるナイロビ駅のプラットフォームを撮影した絵葉書

出典: <https://www.oldeastafricapostcards.com>.

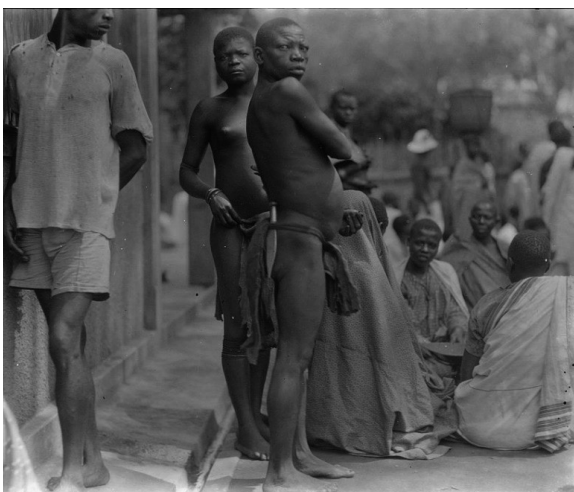
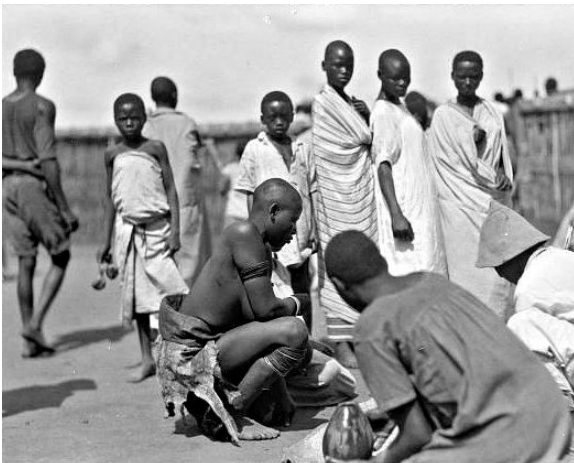


図4/図5 エリック・マトソンによる

1936年のウガンダのフォート・ポータルの市場

出典: Matson Photo Service, photographer. (1936) *Uganda. From Hoima to Fort Portal. Types in the native market. Women.* Uganda. Uganda, 1936. [Photograph] Retrieved from the Library of Congress, <https://www.loc.gov/item/2019708264/>

ファリルックとは異なることがわかるかと思います。こちらが現地人の装いでした。このように比べてみると、洋装とされた服装とそれ以外との区別が少し理解しやすいかもしれません。サファリルックの集団の横には帽子を着用したインド系とみられるフル洋装の人々もみられます。これに対し右側柱近くの二人は、荷役と警察か治安担当であり、その制服に近い装いをしていると推測されます。

ナイロビは内陸とはいえ英領東アフリカの首都にあたり、都市として急成長しイギリスの支配力が強い場所でした。これに対して、都市化の進んでいない内陸部に広がっていった装いを見ていきましょう。これには、1936年に帝国鉄道の広報のためナイルを南方へスーダンからウガンダへと下り、ケニア、タンザニア、ザンジバルへと旅して道々撮影を行った写真家のエリック・マトソンの写真を参考にします。図はフォート・ポータルという、ウガンダのさらに内陸のルワンダに近い都市のマーケットの様子です。

写真家マトソンは旅行者らしく、多くの写真で、「伝統的」とされる装い——上半身が裸で、腰に毛皮や細い布をまとい、腕やひざに紐飾りをつけている人を、画面の真ん中にしてフォーカスしています。図4、図5ともにそのような写真です。しかし、両方の写真で、その周りの人々がほとんど綿布や衣をまとっていることに注目してください。図4には布を一枚で巻いた女の子がいますが、これがシューカと呼ばれる巻布で、腰だけ巻く場合も胸まで巻く場合もある一枚

No Image

No Image

図6/図7 ウガンダ国営日刊新聞『ニュービジョン』掲載記事にみる
1940年代のゴメシドレスを着用するブガンダの女性たち(左)と、ゴメシドレスが発達する経緯を示したイラスト(右)
出典: The gomesi: Uganda's treasured dress - New Vision Official (2022年2月10日閲覧)

布です。また縞の一枚布を羽織った人もいます。それに対し、男性は、襟が少しついているか、ついていない丸襟のシャツをまとい、半ズボンを着用している人がほとんどです。さきほどのナイロビ駅のシャツと半ズボンのスタイルに連なる装いといえます。

マトソンがこれらの写真を撮影したほぼ同時期に、東アフリカを訪れた中川治彦は、『東アフリカに就て』(日本輸出協会資料叢書、1937年)において、ウガンダでは7~8割が裸であると述べています。この場合の裸とは、上の写真でマトソンが真ん中にフォーカスした腰に毛皮や紐をつけて布を垂らすスタイルも含んでいます。中川はさらに、沿海の都市部では、「白人の姿に倣って、ワイシャツ、スーツ、半ズボンをはき、女性はワンピースドレスとハイヒールを着る者もいる」としています。その一方で、「ムスリムに影響されていると、裸でいることも洋装することもできない」ため、別のスタイルとしてカンガを着用し、その姿は「行燈袴」のようにみえるといっています。これが中川の解釈によるスワヒリスタイルです。そして、ホテルや白人邸宅のアフリカ系サーヴァントがこのスワヒリの恰好をしていると報告しています。ところで、中川は「状況がもっとわるい」内陸部では、綿の粗布を巻き付けたり、それからできた衣類を着用しており、布を多く巻いて「綿のおばけ」のようにみえる人もいとさえいっています。このように、中川は1930年代後半に内陸部でも綿布を着用する人が多いことを指摘しています。

またこの内陸で展開したいわば第三のスタイルが

さらに発展したものとして、中川氏は興味深いことを述べています。それは「ウガンダの一地方では、日本人が売り出したからか、朝鮮のチマチョゴリにも見えるふくらんだスカートとチューブ型の袖の上衣を着て、とても明るい色の人絹でできた、リボンのようなものを結んでいる人たちがいる。」という報告です。これはおそらく、ゴメシドレスのことを言っていると推測されます。同ドレスは、巻布(シューカ)から発達した経緯をもちます。東アフリカには古くから樹皮布がありシューカがつけられていましたが、これがこれまでみたように輸入綿布にかわっていきました。ゴメシドレスは1905年ごろに高等学校の制服に採用され、またその後王妃が戴冠式に礼服として着用したのを機に、袖を付けるか、下に半袖のシャツを着用するようになり、今日のスタイルへと発展していきました。前回の研究会で香室結美さんが発表されたヘレロ族のドレスも大変興味深かったですが、ゴメシドレスは、一見洋装のドレスをベースにしたものにみえますが、巻布であるシューカに袖をつけた形で発展したものといえるわけです。

以上、戦間期の東アフリカでは内陸部にわたって綿布を中心とした装いが出てきましたが、それらはシャツや半ズボンといったアイテムであっても、洋装とは現地でとらえられていなかったことを強調したいと思います。こうした展開があったなかで、日本製品が提供した新しい価値とは何なのかについて次に述べたいと思います。

II 日本製品が提供した新しい価値

衣類用粗布「ジャパニ」の提供した新しい価値

東アフリカでシューカなどに衣類に使われた最初の綿布は、アメリカが提供した未漂白シーティングだったので「アメリカニ」と呼ばれていました。日本では「粗布」とされますが、もともとはシーティングなので薄いものでした。アメリカニはシューカやカンズーと衣類全般に使われ、1910年の時点では大半がアメリカ製でした。ところが1926年のモンバサの市場調査では、アメリカニの80パーセントが日本製となったとの報告があります。この粗布は「ジャパニ」と呼ばれるようになったと一部の日本人が言っています。

注目したいのが、幅と重さと厚さと価格において、日本製品が他国製品とは異なっていたという点です。表からわかるように、日本製はまず厚くて、幅もやや広めでした。とくに日本製品の価格は、アメリカ製やインド製品に比べて安いわけではなく、むしろ高かったのです。

領事報告の中で、このジャパニの新しい価値は、まず厚いので耐久性があったことが指摘されています。特に内陸部は鉄道で運送しなければいけないので、都市よりもさらに価格が高くなります。このときに、薄いシーティングではなく、一枚布で使える厚めの布が好まれていったと思われます。加えて、洗えば洗うほど白くなったことが人気を呼んだと述べられています。これも白さを好むならば漂白布が望まれるのではと考えますが、そうではなく、丈夫な未晒布で洗えば洗うほど白くなる点に人気があったと指摘されています。こうした好み形成された背景に、同じころ展開していたイギリス植民地政府による石鹸マーケティングがあるとも考えられます。当時の石鹸マーケティングの広告を調べていくと、白さを肌の色と結びつけた表現も多くみられますが、これらは白人だけでなくアフリカの人々にも向けられた広

告でした。石鹸を使うと洗濯すると白くなるということの価値を植え付ける試みであったといえます。洗うほど白さが際立つ日本製のアメリカニは、宣伝されていたこうした価値観に合致したと考えられます。

メリヤス(莫大小)シャツも

内陸のスタイルに取り込まれる

メリヤスシャツは1920年代に特に輸入が増えています。日本では明治時代にメリヤス生産が開始しますが、当初から輸出志向でした。すぐに中国、フィリピン、インドを市場として輸出がはじまりますが、第一次世界大戦の前後にこれらの地域でメリヤス生産が始まり、日本の輸出は伸び悩んでいました。そこでアフリカが市場として注目されました。

メリヤスは、北アフリカ、西アフリカにも輸出され、関税が低い場合は、ナイジェリアやシエラレオネでも比較的早く日本製品が席捲するようになったといわれています。英仏政府による輸入制限が比較的緩かった東アフリカでは1920年代に輸入が急増しました。1926年にザンジバルのメリヤス輸入量は前年比で三倍増し、また、モンバサへの直行航路がひらいたタンザニアは、1931年にはメリヤス製品の90パーセントが日本製になったと領事報告には述べられています。残念ながら当時のアフリカに輸出された日本製メリヤス衣類の現物資料は見つけられておりません。写真資料からは記事がメリヤスであるかどうかを判断するのが難しいのですが、1930年代のザンジバルやモンバサの市街やマーケットの写真にはメリヤスらしきシャツを着用した男性がみられます。

さらにこうしたメリヤスシャツはとりわけ内陸部の需要が大きかったと、領事報告書では繰り返し述べられています。たとえば、「莫大小の主要な需要地はケニアより内陸のウガンダにあった」と言われ、「高原地では夜間は寒冷だから特にメリヤスの肌触りが好まれた」と言っています。やはりここでも、中に着ている人もいるかと思いますが、一枚布で着ることが多かったようです。先に取り上げた、1936年

表1 1926年のモンバサ市場における各種アメリカニの価格

	産地	幅 (インチ)	長さ (ヤード)	重さ (ポンド)	30ヤード毎の価格 (シリング)
<i>Americani*</i>	米国	32	30	5-5.5	11s-12s
<i>Americani Camthi</i>	インド	32	30	6	10.75s
<i>Americani</i>	日本	36	30	8-10	15s-17s

出典：外務省通商局「英領東アフリカ事情」、1928年。

のウガンダを撮影したマトソンの写真群にも、図5を含め、メリヤスとみられる衣類を着用した人々が登場します。

おわりに

本報告では、アフリカに向けられた日本製シャツが、洋装やスワヒリとは区別された第三の分類のなかで成長していったことに注目しました。先行品に対して、日本製品は現地で拡大する新しいニーズに即していました。安さが強調されますが、それだけではないと言えるかと思います。ただし、安さ自体も、イギリスが現地の人にモノを売る際には「べつに安いモノを売らなくてもいいじゃないか」という姿勢があったのに対して、日本人は「いま一番拡大している新しい内陸部の人たちは、安くなければもちろん買わないだろう」と意識して、現地の需要に合わせる姿勢があったと、領事報告にも述べられています。日本製品は、たとえばゴム靴なども人気が出てきますが、その価格を10分の1にしたと言われています。

冒頭に問題提起したように、日本製品が欧米の追随・模倣品であったということを強調しすぎると、アフリカの人々が衣類に求めていた機能や特性も、それに伴って生じ、日々変化していた規範も読み取れなくなる危険があると思います。こうした点を追求していけば、たとえば産業化と貿易の未発達な段階で取引されると位置付けられ、その価値や用途があ

まり注目されていない「粗布」も、広くダイナミックな展開をとりえることに気づけると思います。織物の貿易統計が「粗布、漂白布、捺染布、衣類」と分類されるためそのように分析する傾向が強いですが、現地の装いに即した分類で考えていくべきでしょう。

最後に、本発表で論じたメリヤスや綿シャツと半ズボンのスタイルは、東アフリカにおいて、第二次世界大戦後は「伝統着」ともいえるカテゴリーに属するようになったということに触れたいと思います。図8は1960年代にケニアの副大統領が公的行事に着用した衣装です。この装いは時々サファリスーツと説明されておりますが、本発表で説明した流れを強くひくもので、これを欧米人の着用したサファリスーツに準じるものであるとか、洋装を簡略化したものと捉えるべきではないと考えます。さらに、ウガンダをはじめこの地域では、伝統的なダンスを踊る衣装としてメリヤスシャツを着用することがしばしばみられます。これもまた、本発表で説明をした流れからすると、伝統的には上半身は裸であったが、それを避ける現代的な配慮で「肌着」を着用しているというような歴史を抜きにした解釈をせず、東アフリカ独自のメリヤスシャツの規範のなかで理解されるべきもので、その流れの中に日本製シャツも位置付けられるべきだと考えます。



図8 1967年にアフリカ的首脳陣を迎えるケニア副大統領のアラップ・マイの公的行事でのシャツと半ズボンの装い

出典: Smith Archive・Alamy Stock Photo

■ 質疑応答

帯谷知可(司会) たいへん内容の濃いお話をありがとうございました。杉浦さんはもともと経済史がご専門でいらっしゃるんですが、装い、布、衣を切り口に、グローバルヒストリーも視野に入れたご研究を進めておられて、たいへん興味深かったです。いくつかこれまでこのワークショップで話題になってきたトピックとも関わりのあることが出てきたと思います。植民地主義に関連してかなり興味深いポイントもあったのではないのでしょうか。

森理恵 たいへん興味深いご発表をありがとうございました。簡単な質問ですが、メリヤス製品の縫製はどこでしていたのでしょうか。それと、この後させていただく私の発表と、内容は違いますが同じ時期のことでも興味深く思ったのですが、1940年以降、つまり太平洋戦争中はどうなっていくのでしょうか。

杉浦末樹 メリヤスの縫製は、日本でしておりました。メリヤスは生地輸出というカテゴリーもありますが、アフリカ向けにはほぼありません。

そして太平洋戦争中については、1942、1943年からまったく輸出しなくなりました。

森 再開はいつですか。

杉浦 再開は1940年代末期から1950年代です。地域によって違いますが、1940年代末期には東洋紡がカンガ生地を輸出しています。東アフリカにおいて1950、1960年代は、日本製品は人気がありました。そして1970年代にパタッとやみます。

平芳裕子 興味深いご発表をありがとうございました。一枚布で着られるシューカやジャパニということでしたが、日本側の輸出品目としては、布類ではなく衣類に入るのでしょうか。

杉浦 シューカ用のメリカニは粗布で輸出品目は布類に入っています。ただし、ほとんどが衣類に使われていました。カンガは、捺染布で輸出品目はこれも布類になります。